

造墓史料にみる近世琉球の亀甲墓

Turtleback Tomb of Modern Ryukyu: A Study of Historical Records on Tomb Construction

川元 哲哉

KAWAMOTO Tetsuya

ABSTRACT: The object of this research paper can be expressed as one simple question: In comparison with other prefectures, why are the Okinawa tombs much larger in size? The turtleback tomb, one of the largest tomb types in Okinawa, is widely known to have been imported from China since the Modern period; however, there have been few studies made on the period of its adoption and its diffusion process in the Okinawa prefecture. This paper analyzes the historical records on tomb construction and discusses the background of this tomb type, focusing on the reorganization of the Modern feudalism in the late 17th century, the period in which the turtleback tomb had first appeared in Okinawa.

1. 問題意識と分析方法

沖縄の墓は規模が大きい。県外出身者だけではなく、沖縄で生まれ育ってきた者にとっても、このことは素朴な疑問であると思う。沖縄県外で一般的に見られる石塔墓と違い、沖縄の墓は切石を漆喰で固めた建造物そのものである。

このような、大規模な墓は沖縄においていつ頃あらわれたのであろうか。

現在、沖縄の代表的な墓の一つである亀甲墓は奄美諸島で確認されていないにも拘わらず、沖縄全域に分布している事実は、近世以降に初めて亀甲墓が県内で造墓されたということになるだろう¹⁾。

しかし、この亀甲墓の受容時期や普及過程について体系的にまとめられた研究論文は、史料が稀少であることもありほとんどない状況である。このような場合、どのような分析が有効であろうか。

亀甲墓は近世期に出現した墓であり、これを研究対象とするならば近世の、特に出現期にスポットを当てて論じなければならない。具体的には17世紀後半の近世封建体制の再編期に注目し、亀甲墓がどのように受容され、その成立と展開に影響を与えたのかという視点で造墓に関する史料を中心に論述してみたい。

2. 最初の亀甲墓

亀甲墓は近世になって初めて確認される墓の形態の一つであり、その名称は墓屋根の形からきている。伊波普猷は、自著の中で「カーミナクー」という方言に則して「亀の甲墓」と書いているが、現在の学術論文では一般に「亀甲墓」と記されることが多い。この亀甲墓が出現したのは17世紀後半といわれている。それも首里石嶺にある伊江御殿の墓が最初のものであるという。その根拠はどこからきているのだろうか。

伊江御殿の墓を最初の亀甲墓と推定したのは東恩納寛惇である²⁾。東恩納は「伊江家伝」を引いて、同家の石嶺の墓を造ったのは5世朝敷（1635～1710）であり、造墓にさきだって「タイロウ」という中国人の風水見に墓地を見てもらった、という伝承を紹介している。これは東恩納が伝承を紹介したという形式であり、確実な史料であるとはいえないが、『尚姓家譜（伊江家）』のなかに伊江御殿の墓について記録されている箇所がある。6世朝嘉（1652～1710）の康熙26年（1687）の項に³⁾、

本年父朝敷呈請墳地五端八畝二十三歩于西原間切儀保境内經營未成予繼父之志修作墳墓
而誌歲日於勝地安?祖先則子々孫々自然榮昌然命運不常譬值衰微雖受肌寒之苦而輕愼
祖塋放棄園地則不孝之罪不勝指屈矣

とある。朝嘉が先代の拝領した墓地に造ったこと、造墓に際し風水⁴⁾を見立てたこと、勝地であるから子孫も自然に繁栄するであろうこと、「肌寒之苦」に見舞われたとしても墓を売ってはならないこと、が記されている。

この史料の造墓記録には、風水見である「タイロウ」の名はみえない。しかし、造墓に際して風水の勝地が選ばれたのは間違いのないであろうから、亀甲墓に風水の思想が投影されているといえるのではないだろうか。

3. 墓地風水の伝来

そもそも風水は琉球にいつ伝来し、普及していったのか。都築晶子の一連の風水研究を要約すれば、沖縄の文献の中に風水という言葉が姿をあらわし、琉球王府の事業、村落・墓地などの立地に風水術が用いられるのは、17世紀後半に入ってからということになる⁵⁾。17世紀初頭、琉球王国は島津藩の侵入を受け、その統治下に入る。すでに14世紀中葉以来、琉球は日本・朝鮮・中国・東南アジアを結ぶ中継貿易を行っていたのであるが、その中継貿易において航海術、通訳などの役割を担ったのは、その前後に福建から琉球に渡来して久米村を居留地としていた中国人であった。

中継貿易の衰退とともに久米村もさびれていたが、17世紀以降の近世琉球の新体制の下で、久米村に唐営籍が設置され、周辺の中国人、中国語に堪能な琉球人も唐営籍に編入されて久米村の再編が行われた⁶⁾。

こうして、唐営は進貢貿易に深く関与したばかりでなく、中国文化受容の担い手ともなり、同時に琉球王府内での地位も高まっていったのではないだろうか。風水が唐営士族の子弟を介して福州から琉球へと伝えられたのは、こうした時代を背景としていたのである。

この風水のなかで墓地風水はどのような位置付けなのだろうか。私は「風水」について論じること自体幅広く奥の深い学問の一分野だと認識しているし、全体像を把握するのは容易でないと思っている。しかし、あえて「風水」を学問として分類すると、その構成は概ね<尋竜法><五星論・九星論><村落風水><墓地風水><屋敷風水>にわけられる。墓地風水は、死者の埋葬、墓の造営と修理の際の干支による日選び、墓地の方位、亀甲墓の造営図面の作成等をおこなうものである⁷⁾。「久米村家譜」「首里家譜」の中には、墓地風水の善悪により家門の盛衰も生ずるということ、隣地における田畑や墓の造営など土木事業忌避、風水景観の護持などの観念をみいだすことができる。

墓地風水、ひいては風水を受容した背景に王府と久米村の関係があることを先に述べたが、王府は墓地風水をどのように受け止めていたのだろうか。特に大きな墓敷地を必要とする亀甲墓と田畑との関係について、康熙36年(1697)の「法式」では、墓地を農業に差し障りのない土地に造るよう一定の制限が加えられた⁸⁾。嘉慶14年(1809)の「田地奉行規模帳」ではその制限はさらに厳しいものになっている。

墓所之儀、可成程先祖墓相用、新敷仕立不申候而、不叶節ハ、山林竿迦ヨリ敷場見立、
本地方へ致相談申出候ハ、奉行見分之上、諸士ハ拾貳間四間、町百姓六間四間、針図
仕付御印紙ヲ以テ作調サセ候事

できるだけ先祖伝来の墓地を用い、新しい墓地を造営するときには、植林や農耕に差し障りのない土地を選んでその地の役人と相談した上、田地奉行の検分を受けること等々、がうたわれている。

このように、琉球の墓地風水には、村落移動と同様、田畑との関係に相当の関心が払われており、王府による制限が加えられていることがわかる。つまり、墓地風水は王府の制限の中で行わなければならない学問であるという一面をもっていた。

少なくとも、風水の本場福建や朝鮮でよくみられる墓地風水をめぐる訴訟、紛争（墓地争い）が琉球では確認できないことから、墓地風水は現実に則した風水術⁹⁾、あるいは琉球の事情に合わせてアレンジされた可能性があると考えられる。墓地風水は思想面においてそれまでに琉球に存在した遺骨尊重の観念に合致し、また実践面においても王府の意向に対立しない形でとりおこなわれていることがわかる。

4. 史料に見る造墓・墓の形態

亀甲墓の造墓に風水見が深く関与していることを前節で述べた。造墓に関する史料としては先の伊江御殿の墓の記録をはじめ、十数件が知られている¹⁰⁾。この節では具志川御殿の墓、梁氏（小宗梁邦基）の墓、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓、具志川村西銘の仲村家の墓の造墓記録を紹介する。亀甲墓の成立と展開を考えるうえでの基本史料としたい。

[具志川御殿末吉の亀甲墓]

向姓具志川家は王子尚韶威を先祖とし、歴代山北監守を勤めた。8世今帰仁按司朝又の時に首里に移住した。9世今帰仁按司朝季（1679～1724）が西原間切末吉村に新たに墓を造った。乾隆26年（1761）に10世今帰仁王子朝忠（1701～1787）がこの墓地の永代私有を王府に願い許されている。願い出た分文書の写しと墓図（造墓史料①）が『向姓家譜（具志川家）』に載っている¹¹⁾。

造墓年代がはっきりしないが、9世朝季がこの墓を造ったのは、1691年（8世朝又が死去した年）から1724年（朝季の死去した年）までの間ということになる。

[梁氏（小宗梁邦基）の墓]

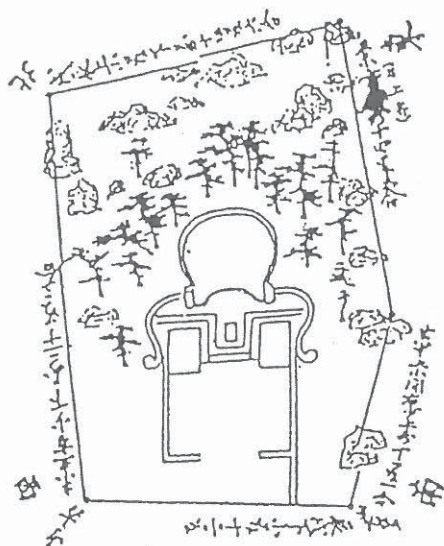
『梁氏家譜（九世梁邦基）』の11世都通事梁延権（1730～1785）の記録に、封阡（造墓の記録）がある。10世中議大夫梁鼎（1693～1739）が雍正11年（1733）に得た墓地に、梁延権が乾隆18年（1753）に墓を造ったと記されている。封阡の項には亀甲墓の墓図も載っている。（造墓史料②）¹²⁾

墓の形態を見ると、ウーシ（臼）と袖石が明示されていることがわかる。庭囲いは左右の張り出しだけである。形態だけでなく、墓室の構造を記録しているこの史料は貴重である。

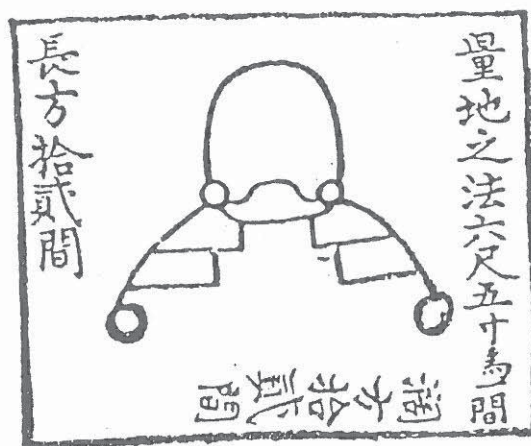
[鄭姓（小宗鄭士紳）の墓]

『鄭姓家譜（五世鄭士紳）』にヒンブンのある亀甲墓の墓図が確認できる。6世の鄭鴻勳（1716～1779）の封阡の項に、「波上兼宮墓坐辛向乙 乾隆三十一年丙戌三月初八日鴻勳買之故記之為以異日之証図見作霖封阡」と記されている。次頁の造墓史料③は、7世鄭作霖（1737～1808）の封阡の記録である¹³⁾。乾隆31年（1766）に6世の鄭鴻勳が墓を買い、これに隣接する墓を7世鄭作霖が乾隆59年（1794）に買い、道光2年（1822）に二つの墓の間を仕切り対墓にした、というものである。墓の位置は、1766年に買った墓の場合、坐辛向乙（西北西を背にして東南東に向かう）で、1794年に買った墓のほうは、坐戌向辰（北西を背にして南東に向かう）である。この史料は、墓が不動産として売買されていたことを伝えるものとして貴重である。

(造墓史料①)



(造墓史料②)



(造墓史料③)

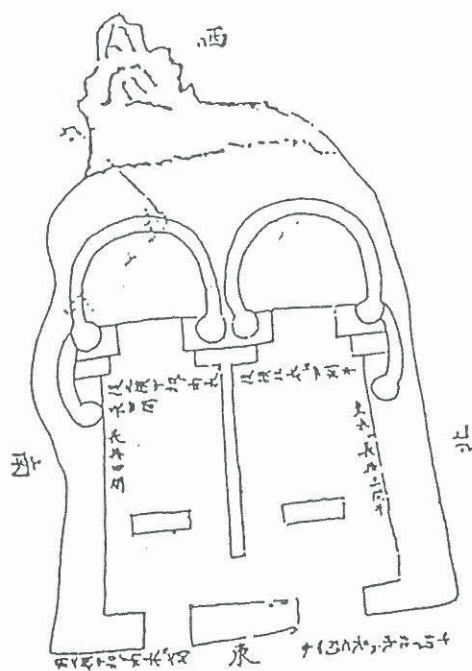


图1 龜甲墓造墓史料

次の図2は造墓史料①・②・③でとりあげた亀甲墓の図を参照にして、平面略図にしてみたものである。

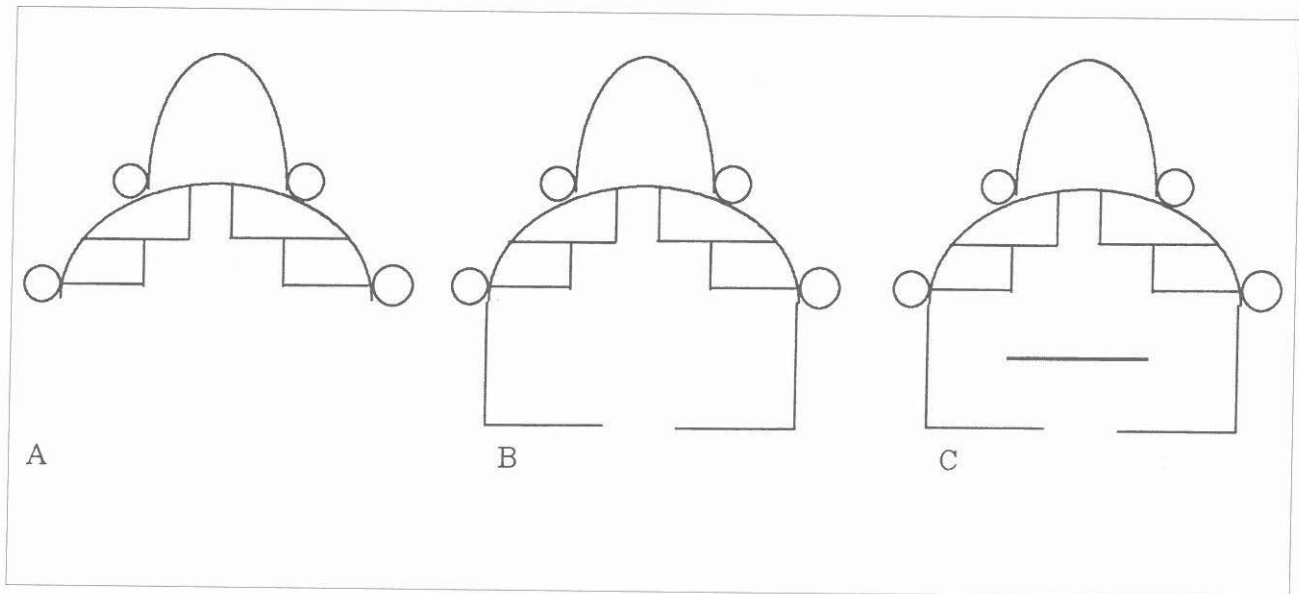


図2 亀甲墓の平面略図

これらの平面図に共通する要素は亀甲の形と左右手前の張り出しである。個々に墓型を述べると、梁氏（小宗梁邦基）の墓は庭囲いのないA型、具志川御殿の末吉の亀甲墓はB型であり、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓はC型であるといえる。A型は現在の福建によく見られる型式であるという。庭囲いの型式から考えると、B型からC型へと推移したことがわかる。墓庭にヒンプンを建てるC型については福建で確認されておらず¹⁴⁾、近世琉球におけるオリジナルタイプではないだろうか。また、造墓史料の年代と型式学的検討から、C型が最も新しいタイプであるといえる。

[久米島具志川村の仲村家の墓]

続いて離島農村への亀甲墓の普及を久米島具志川村仲村家の造墓史料を使ってみていくことにする。

仲村家の墓について、上江洲均が「久米島の墓制に関する資料二題」の中で論述しているが、この墓は具志川村字太田の小港松原にある。墓庭に「具志川間切小港松原墓之碑」があり、碑文は下のようになっている¹⁵⁾。

予家世世奉仕、受爵、然係支流之家、而墓未之築焉。康熙五十五年丙申冬、進貢正議大夫末吉親雲上、赴中華時、暫泊于兼城泊、修葺船隻。為予、挾墓地于小港松原。之艮山坤向之墓地也。越年丁酉十一月十九日起工、至于翌年戊戌正月、告成。

大清康熙五十九年庚子八月吉日、愚孫山城鏡分昌敷謹立。

康熙55年（1716）に清に進貢に行く途中の末吉親雲上（蔡温）に墓地を見立ててもらい、康熙56年（1717）11月に着工し、翌年1月に竣工したことが刻まれている。この史料は、首里・那覇に亀甲墓が出現すると間もなく、地方役人層も久米村風水見（ここでは末吉親雲上）に依頼し、これを造るようになったことを示している¹⁶⁾。特に、王府進貢船が寄港した久米島ではいち早く受容されたので

はないだろうか。

では、近世琉球全土のわたり亀甲墓は普及したのだろうか。亀甲墓の造墓紀年の上限が明治年間という村も、特に本島北部を中心に少なくない。国頭村字安波で最古の亀甲墓といえ、明治6年(1873)に造られたムラ墓である。大宜味村字根路銘、名護市安和、幸喜でも明治期になってから亀甲墓を造りだしたことが知られている¹⁷⁾。

上の事例から推測できることは、まず中央である首里・那覇につながりのある地方役人層から亀甲墓を受容し、農民層にはかなりの時間をかけて徐々に広まったということ、そして亀甲墓を受容した時期、その浸透度には地域差が著しいということである。

5. まとめ

亀甲墓という独特な墓の形態について、これまで造墓史料を中心に論述を試みてきた。まず、先学の風水研究を参考にし、墓地風水は思想面においてそれまで琉球にあった遺骨尊重の観念に合致し、また実践面においても王府の意向に対立しない形でとりおこなわれていることを示した。この墓地風水によって受容された墓が亀甲墓である。東恩納寛惇によって最初の亀甲墓と推定された伊江御殿の墓は、「自然栄昌」の勝地が選ばれており、風水思想が投影されていることがわかる。

具志川御殿の家譜をはじめとして3つの造墓史料を例示し、亀甲墓の成立と展開を考えるうえでの基本史料とした。大規模な墓仕立の際には、王府へ届け出る(許可制)ことや、一族の系図や履歴の記録である「家譜」にこの造墓史料が記されていたことは、士族層の財産として亀甲墓があつかわれていたことを示すものである。

また、本島北部・周辺離島への亀甲墓の普及について、久米島の造墓史料や民俗学調査資料から、亀甲墓を受容した時期、その浸透度には地域差が著しいことを紹介した¹⁸⁾。

そもそも著者の「沖縄の墓はどうして大きいのか」という素朴な疑問を解明するためには、造墓史料のみならず、当時の人々が死者にたいしてどのような思いを抱いていたのかという死生観の問題や、墓の構造や立地条件など様々な視点が必要であることを認識している。近年、沖縄県内において数多くの近世墓の発掘調査が実施されており、今後はその調査成果から得られた史資料を含めて亀甲墓の受容時期を中心に論考を重ねていきたい。

(かわもと てつや：調査課 主事)

註

- 1) 琉球史において、トカラ列島から与那国島まで「琉球文化圏」と定義され、共通する民俗事象が多いことが指摘されている。その中で亀甲墓が沖縄全域に分布しているのに対して、奄美諸島以北で確認されていないのは、奄美諸島が薩摩の直轄領となった1609年以降に、亀甲墓が中国からもたらされたと考えられるからである。
- 2) 東恩納寛惇「亀甲式墓と會得魯」『琉球新報』1月13日・14日(琉球新報社 1956)
『東恩納寛惇全集 巻8』P285(第一書房 1980)所収。
- 3) 『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』P329(那覇市史編纂委員会編 1982)
- 4) 風水を定義づけるのは難しいが、都築晶子は先学の諸研究を要約して「中国では、自然を『氣』の流れる一個の生命体とみなした。この氣の流れは場所によっては凝縮し或いは拡散する。人間もこの氣の流れと相互関係の中にある。かくして、目に見えぬ氣の凝縮する地点を、自然の環境、景観から見極める術が生ずる一風水とは、狭義にはこの術をさし、広義には自然の環境、景観に対する象徴的解釈の体系をさす。」としている。都築晶子「近世沖縄

における風水の受容とその展開』『沖縄の風水』P15（平河出版社 1990）

5) 同註4 P17

6) 琉球の対外貿易および久米村の歴史的変遷については、高良倉吉『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて—』（筑摩書房 1980）参照。

7) 同註4 P37

8) 「法式」『沖縄県史料 前近代1』P65、「田地奉行規模帳」『沖縄県史料 前近代6』P142所収。

9) 向氏の嘉味田家は1680年頃、風水師に依頼して東風平の富盛に墓を移すが、往復に不便なため、20年後再度風水師に依頼し、首里に近い真和志の大道に墓を移している。『シンポジウム南島の墓』P94

10) 平敷令治『沖縄の祖先祭祀』2篇4章2節「亀甲墓」P327

11) 右亡父代西原間切末吉村西百姓地山野之内絵図朱引之通讓取墓仕立置候間、永々為墓地被下度奉存候、此旨御披露頼存候、以上

乾隆二十六年辛巳巳

今帰仁王子

『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』P274（那覇市史編纂委員会編 1982）

12) 乾隆十八年癸酉築墓于雪崎雍正十一年癸丑五月先父所ト呈准之地未及築開而卒余承遺命至于本年正月起工二月築成积二十日改葬先祖父母先兄五位靈柩墓図開後右墓在護道院之後坐辛朝乙外像神亀内長玖尺濶染尺後壁前有四尺床一座左右各有一小床庭長参丈二尺伍寸濶壹丈玖尺兩傍築小石墳

『那覇市史 史料篇第1巻6（下）』P785（那覇市史編纂委員会編 1982）

13) 波上兼宮三帽崖墓在鴻勲墓左右相分永為対墓故今記之以為後証

『那覇市史 史料篇第1巻6（下）』P691（那覇市史編纂委員会編 1982）

14) 「中国の亀甲墓は正面にはその墓の碑が建っているわけで、そこには出入り口は造られていません」北谷町教育委員会 中村愿氏の指摘。『シンポジウム南島の墓』P78

15) 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』（慶友社）

16) 『仲里村誌』P130（仲里村誌編纂委員会 1975）参照。

17) 『沖縄民俗 第10号 5周年記念号』P57（琉球大学民俗研究クラブ 1965）

18) 宮古城辺町字友利・砂川でも明治にはいつてから亀甲墓を造りだしたことが知られている。同註17

また、石垣島では乾隆48年（1783）から亀甲墓が造られるようになったといわれており比較的早い時期に受容した墓も確認されている。喜舎場永珣『八重山民俗誌 上巻』P624

参考・引用文献

平敷令治 1995 『沖縄の祖先祭祀』第一書房

小川徹 1987 「沖縄における若干の墓型とその年代」『近世沖縄の民俗史』弘文堂

沖縄県地域史協議会編 1989 『シンポジウム南島の墓』沖縄出版

沖縄県教育委員会 2000 『沖縄県文化財調査報告書第137集 喜友名泉石畳道 喜友名山川原丘陵古墓群 伊佐前原古墓群』

高良倉吉 1980 『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて—』筑摩書房

高良倉吉 1985 「トボスとしての墓」『地域と文化』ひるぎ社

都築晶子 1990 「近世沖縄における風水の受容とその展開」『沖縄の風水』平河出版社

上江洲均 1982 『沖縄の暮らしと民具』慶友社

『東恩納寛惇全集 巻8』 1980 第一書房

『伊波普猷全集 第5巻』 1974 平凡社

『那覇市史 史料篇第1巻6 (下)』 1982 那覇市史編纂委員会

『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』 1982 那覇市史編纂委員会

『沖縄県史料 前近代1』 1981 沖縄県史料編集所

『沖縄県史料 前近代6』 1989 県立図書館史料編集室